『教科適用幼年唱歌』のなかにみられる田村虎蔵の唱歌教材観
―曲節の分析を通して―

山　田　めぐみ
（本講座大学院博士課程前期在学）

Sight-Singing Materials of Torazo Tamura as Used in *Yonen Shoka: Kyoka Tekiyo* through an Analysis of Melody

Megumi YAMADA

Abstract

This study examines the use of sight-singing materials and makes a comparison of their employment in *Yonen Shoka: Kyoka Tekiyo* and other works by Torazo Tamura. This study pays particular attention to the use of sight-singing materials with respect to melody and in terms of time, mode, and musical range. Tamura was a musical educator and composer who was active in the Showa and Meiji periods, and he played a major role in the development of music education in Japan. Tamura described sight-singing materials in books and magazine articles. His *Jinjo Shogaku Shoka Kyojusho* was published over the period of 1913–17; this work appeared after *Jinjo Shogaku Shoka*, which was published from 1911 to 1914. In these books, Tamura describes his use of sight-singing materials developed based on his practical experience over many years. *Yonen Shoka: Kyoka Tekiyo* is a collection of songs that was edited by Tamura along with others, and it was published from 1900 to 1902. This latter volume was written for first- to fourth-grade elementary school students. Tamura declared that the book was compiled with an educational purpose in mind. The present study presents the results of an analysis with respect to correlations between time and mode in the teaching materials of Tamura, and it also takes musical range into account.

Ⅰ　研究の背景と目的

田村虎蔵（1873-1943）は，明治期から昭和期にかけての音楽教育家兼作曲家であり，我が国の音楽教育の発展に大きな役割を果たした人物の一人である。東京音楽学校兼東京高等師範学校助教授として音楽を教えていた際に，音楽教育における様々な改革を行ったが，そのひとつとして言文一致唱歌の提唱があげられる。田村は，当時の唱歌科において，教科書のひとつとして扱われていた『小学唱歌集』（明治 15 年～明治 17 年）の難解な歌詞や，子どもの心情と一致していない曲節に対して疑問を持ち，日常の話し言葉に近い歌詞を理想としたのである。このような，子どもの姿をふまえた教材への評価は，現場における長年の唱歌教授経験にもとづいていると考えられる。同時に，田村は自身の唱歌教材観を雑誌や著書のなかで述べており，唱歌教材への関心の高さをうかがわせる。

田村の教材選択観を詳細にあらわしたものとして，田村虎蔵著『尋常小学唱歌教授書』が挙げられる。この著書は，明治 44 年～大正 3 年にかけて文部省から『尋常小学唱歌』が発行されたことを機に，大正 2 年から大正 6 年にかけて出版されたものであり，『尋常小学唱歌』に対応して，第一学年から第六学年の 6 冊で構成されている。各冊とも全三章で構成されており，第一章では東京高等師範学校附属小学校及び附属中学での長年の経験をふまえて，各学年の児童の特徴や習得すべき学力が教師の視点から記され

ている。また，第二章では，『尋常小学唱歌』に対して，曲毎の評価を記すとともに，各曲における教授法を述べている。そして，第三章の教授細目は，東京高等師範学校附属小学校で実施しているものを，多少修正して作成したとされる。

田村が編纂に携わった代表的な唱歌集として，『教科適用幼年唱歌』を挙げることができる。『教科適用幼年唱歌』は，田村虎蔵，納所弁次郎共編の唱歌集であり，尋常小学校第一学年から第四学年を対象としている。初編上・中巻は明治 33 年，初編下巻～二編下巻は明治 34 年，三編上巻～四編下巻は明治 35 年に発行された。当時の音楽教科書は，ほとんどが文語体の歌詞を用いていたため，児童にとっては大変難解であり，生活感情に合わないものが多かった。このような弊害を打破するために，言文一致ということが唱えられるようになり，その代表的なもののひとつが『教科適用幼年唱歌』である。

『教科適用幼年唱歌』において，田村は「歌詞曲節ともに，児童の趣味に適合したものでなくてはならない。」[1] とし，「語句は，国語読本の程度に準じ，詩想は児童の思想界を標的として作り，曲節はその音程音域の如何に鑑みて，これを各学年の程度に配当すべきものであると考えた。」[2] と記している。したがって，『教科適用幼年唱歌』は，作曲家であるとともに教育現場で経験を積んだ一人の実践家として，教育的に編纂したものであると推測することができ，田村も「幼年唱歌は，尋常科用の材料として，多少教育的に編纂したものであろうと，自ら今日まで信じて居る所である。」[3] と述べている。

田村の教材観や教育観をはじめ，『教科適用幼年唱歌』に着目した研究[4] は見られるが，各学年における田村の教材観と実際の教材との比較については言及されていない。

そこで，本研究では，『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］から［第四学年］における田村の唱歌教材観と『教科適用幼年唱歌』とを学年毎に比較し，『尋常小学唱歌教授書』のなかで述べられている唱歌教材観が実際の唱歌教材にどの程度反映されているのか明らかにすることを目的とする。なかでも，題目，歌詞，曲節の 3 つの視点を中心にまとめられた唱歌教材観において，本研究では曲節に着目して検討していくこととする。

Ⅱ　『尋常小学唱歌教授書』にみられる田村虎蔵の唱歌教材観

本章では，田村の唱歌教材観，とりわけ曲節における教材観を，『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］から［第四学年］に依拠して学年ごとに述べる。

田村は，唱歌教授においては，曲節の如何が一番大切であると述べている。また，少々歌詞が拙いとしても，曲節が面白いものであれば児童から歓迎され，加えて彼らの性情陶冶もできるため，曲節の選択には多大の注意を要するよう促している。

(1) 第一学年

＜曲節における教材選択の注意点＞

・この学年児童の一呼吸量は極めて少ないため，速度のはやいものであること
・児童が覚えやすいように，同一の旋律が度々反復されること
・和音的音程は歌い易く，歌って気持ちがよいため，四度，五度などの和音的音程に富んだ旋律であること
・自由で変化の多い旋律であること
・快活で，かつ，無邪気で，かわいらしい節回しであること
・曲節中に使用される最低音と最高音，すなわち音域は，1 点ニ～ 1 点ロの範囲をこえないこと
・この学年に課すべき曲節の拍子は，4 分の 2 拍子を九分，4 分の 4 拍子を一分くらいの割合にすること
・旋法は，西洋の長旋法になるもの九分，我が国の律旋法になるもの一分くらいの割合にすること
・この学年の児童の教材は，男女といっても，実はそれほどの区別もない。そうとなると，平易な歌であることに加え，概して快活で，やや勇ましいものを男女を通じて課すべきである

(2) 第二学年

この学年の曲節も，作曲法にとらわれないで，自由な思想をあらわした旋律の方がよいとしている。また，この学年の児童が描く自由画や，自由な綴り方などにおいて表現するような思想に投合させることを

求めている。さらに，この学年においては，第一学年よりもやや曲節として締まりのある旋律を加味することで，徐々に音楽的趣味を向上させることを必要としている。

＜曲節における教材選択の注意点＞

・曲節中に使用される最低音と最高音，すなわち音域は，1 点ニ～ 1 点変ロの範囲をこえないこと
・この学年に課すべき曲節の拍子は，4 分の 2 拍子を八分，4 分の 4 拍子を二分のくらいの割合にすること
・旋法は，西洋の長旋法になるもの八分，我が国の律旋法になるものと我邦人作の短旋法になるものとを取り混ぜて二分くらいの割合にすること

(3) 第三学年

この学年の曲節は，概して勇壮・活発なものが適合するとしている。一方，学年相応の優美な旋律や，音楽的表情に富んだ曲も加えて与えることを必要としている。また，児童唱歌としては，平凡な曲節は大禁物であり，どこか子どもらしい面白味のあるものや特徴的なものがよいとしている。

＜曲節における教材選択の注意点＞

・曲節中に使用される最低音と最高音，すなわち音域は，1 点変ホ～ 1 点イの範囲をこえないこと
・この学年に課すべき曲節の拍子は，4 分の 2 拍子を六分，4 分の 4 拍子を三分，4 分の 3 拍子を一分くらいの割合にすること
（この学年からは，平易な三拍子を加味するのがよいとしている。三拍子を加える理由として，教授上単に曲節の変化を多大にするためばかりでなく，この学年の児童の心理状態にも投合することを挙げている。これは，田村の長年の実験によるところであり，また，欧米における唱歌教授の事情も比較・参照して得た結果であるとしている。）
・旋法は，西洋の長旋法になるもの八分，西洋の短旋法になるもの，我が国の律旋法になるものを二分くらいの割合にすること

(4) 第四学年

この学年の曲調は，概して勇壮・活発なものが適合すると考えている。しかし，第三学年と同じく，学年相応の優美な旋律や，音楽的表情に富んだ曲も加えて与えることを必要としている。また，児童唱歌としては，平凡な曲節は大禁物であり，どこか子どもらしい面白味のあるものや特徴的なものがよいとしている。

＜曲節における教材選択の注意点＞

・曲節中に使用される最低音と最高音，すなわち音域は，1 点変ホ（変ホ）～ 1 点イの範囲をこえないこと
・この学年に課すべき曲節の拍子は，4 分の 2 拍子を四分，4 分の 4 拍子を四分，4 分の 3 拍子を二分くらいの割合にすること
・旋法は，西洋の長旋法になるもの八分，西洋の短旋法になるもの，我が国の律旋法になるものを二分くらいの割合にすること
・この学年からは，変格な小節，すなわち弱起よりなる旋律をも加えて，リズム上の変化を与えること
（比較的難しい拍子をさせることは，この学年児童の心理状態に適合すると田村は考えている。）
・主として男児のみの学級に課すべきものではあるが，現代の我が国民教育上，この学年にも二，三題くらいの軍歌調を課すべきである
（これによってこの学年児童の志気を鼓舞し，元気を振興させてやりたいと田村は考えている。また，この学年児童の心理状態に鑑み，その期待心に訴えて，勇壮，活発なる性情を養成することがねらいであるとしている。）

Ⅲ　田村虎蔵の唱歌教材観と『教科適用幼年唱歌』（明治 33 年～明治 35 年）

本章では，山田（2012）を参考に，『教科適用幼年唱歌』の分析結果をまとめることとする。

『教科適用幼年唱歌』は，田村虎蔵，納所弁次郎共編の唱歌集であり，明治 33 年から明治 35 年にかけて発行された。初編上巻は，尋常小学第 1 学年第 1 学期間に，初編中巻は，第 1 学年第 2 学期間に，初編下巻は，第 1 学年第 3 学期間に，二編上巻は，第 2 学年第 1 学期間に，二編中巻は，第 2 学年第 2 学期間に，二編下巻は，第 2 学年第 3 学期間に，三編上巻は，第 3 学年第 1 学期間と第 2 学期の前半に，三編下巻は，第 3 学年第 2 学期の後半と第 3 学期間に，四編上巻は，第 4 学年第 1 学期間と第 2 学期の前半に，四編下巻は，第 4 学年第 2 学期の後半と第 3 学期間に教授すべき教材を配当している。したがって，『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］には，初編上巻，初編中巻，そして初編下巻が，［第二学年］には二編上巻，二編中巻，二編下巻が，［第三学年］には三編上巻と三編下巻が，［第四学年］には四編上巻と四編下巻が対応していると考えられるため，分析もこの相関関係で進めることとする。

本研究では，客観的な判断が可能である拍子，旋法，音域の 3 点に着目して検討していく。

表１　『教科適用幼年唱歌』（初編上巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	雲雀	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
2	金太郎	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
3	桜	2/4	Gdur	1 点ト	2 点ニ
4	めぐれ	2/4	Ddur（四抜き）	1 点ニ	2 点ニ
5	開いた開いた	2/4	日本音階	1 点ホ	1 点ロ
6	桃太郎	2/4	Cdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ハ
7	友達	2/4	Bdur（四七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
8	蛍	2/4	Gdur（四七抜き）	1 点ホ	2 点ニ

表２　『教科適用幼年唱歌』（初編中巻）音楽的分析

D	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	猿蟹	2/4	Ddur（四七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
2	運動会	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
3	お月様	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
4	雁	2/4	Fdur（四抜き）	1 点ハ	2 点ニ
5	浦島太郎	2/4	Cdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
6	兵隊	2/4	Gdur	1 点ニ	2 点ニ
7	大寒小寒	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
8	雪だるま	2/4	Fdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ニ

表３　『教科適用幼年唱歌』（初編下巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	お正月	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
2	花咲爺	2/4	Gdur（四七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
3	たこ	2/4	Gdur	1 点ニ	2 点ニ
4	梅	2/4	Ddur（七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
5	お雛様	2/4	Gdur（七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
6	親と子	2/4	Cdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ハ
7	舌切雀	2/4	Ddur	1 点ニ	2 点ニ
8	進め	2/4	Gdur（四七抜き）	1 点ニ	2 点ニ

まず，拍子において，『教科適用幼年唱歌』（初編上巻～初編下巻）では，全ての曲で4分の2拍子が使用されていることがわかる。『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］では，4分の2拍子を九分，4分の4拍子を1分くらいの割合にすることが望ましいと記されており，第一学年では4分の2拍子の曲を重点的に扱うことを推奨しているといえる。このことから，拍子に関して，田村の教材観と実際の教材とに一致した傾向が見られる。

次に，旋法において，『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］では，西洋の長旋法を九部くらいの割合にするのがよいと記されているが，『教科適用幼年唱歌』（初編上巻～初編下巻）では，全体の95.83％にあたる23曲が西洋の長旋法，残りの1曲が日本音階となっており，教材観と実際の教材との相関関係がうかがえる。

また，最低音と最高音に着目すると，『教科適用幼年唱歌』（初編上巻～初編下巻）では1点ハ～2点ニまでの音域が使用されていることがわかる。一方，『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］では1点ニ～1点ロの範囲がよいと記されていることから，実際の教材において，最低音では完全1度，最高音では短3度の拡張がなされている。

表４　『教科適用幼年唱歌』（二編上巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	春の野	2/4	Gdur（七抜き）	ロ	2点ニ
2	蝶々	2/4	Fdur（七抜き）	1点ヘ	2点ニ
3	大江山	2/4	Ddur（四七抜き）	ロ	2点ニ
4	池に金魚	2/4	Ddur	イ	2点ニ
5	兎と亀	2/4	Ddur（四七抜き）	1点ニ	2点ニ
6	鶯	2/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
7	蜻蛉	2/4	Gdur（七抜き）	1点ニ	2点ホ
8	松山鏡	4/4	Cdur	1点ハ	2点ハ

表５　『教科適用幼年唱歌』（二編中巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	日の丸	2/4	Fdur（四七抜き）	1点ヘ	2点ニ
2	神武天皇	2/4	Cdur（四七抜き）	1点ハ	2点ニ
3	虎	2/4	Gdur（四七抜き）	1点ニ	2点ニ
4	蜜蜂	2/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
5	海	2/4	Ddur（七抜き）	1点ニ	2点ニ
6	稲	2/4	Gdur（四七抜き）	1点ニ	2点ニ
7	日本武尊	2/4	Cdur（四七抜き）	1点ハ	2点ニ
8	牛と馬	2/4	Fdur（四七抜き）	1点ハ	2点ニ

表６　『教科適用幼年唱歌』（二編下巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最高音	最低音
1	羽子	2/4	Gdur（七抜き）	2点ニ	1点ニ
2	勲章	2/4	Ddur	2点ニ	ロ
3	毬	2/4	Ddur（七抜き）	2点ニ	1点ニ
4	加藤清正	2/4	d moll	2点ニ	イ
5	雪投	2/4	Gdur（四七抜き）	2点ニ	1点ニ
6	烏	2/4	Fdur（四七抜き）	2点ニ	1点ヘ
7	笛と太鼓	2/4	Fdur（四七抜き）	2点ニ	1点ハ
8	牛若丸	2/4	Cdur（四七抜き）	2点ホ	1点ハ

まず，拍子において，『教科適用幼年唱歌』（二編上巻～二編下巻）では，全体の 95.83％にあたる 23 曲が 4 分の 2 拍子であり，残り 1 曲が 4 分の 4 拍子となっている。『尋常小学唱歌教授書』［第二学年］においては，4 分の 2 拍子を八分，4 分の 4 拍子を二分くらいの割合にすることが望ましいと記されていることから，やや 4 分の 4 拍子の曲が少ないということになるが，第二学年において 4 分の 2 拍子の曲を重点的にとり入れた方がよいという田村の考えは見てとることができる。

次に，旋法において，『尋常小学唱歌教授書』［第二学年］では，西洋の長旋法を八分，我が国の律旋法と我邦人作の短旋法を取り混ぜて二分くらいの割合にすることがよいと記されている。『教科適用幼年唱歌』（二編上巻～二編下巻）では，全体の 95.83％にあたる 23 曲が西洋の長旋法，残りの 1 曲が短旋法となっており，やや西洋の長旋法に偏りがちではあるが，ここでもおよそ教材観と教材との相関関係がうかがえる。

また，最低音と最高音に着目すると，『教科適用幼年唱歌』（二編上巻～二編下巻）ではイ～ 2 点ホまでの音域が使用されていることがわかる。一方，『尋常小学唱歌教授書』［第二学年］では，1 点ニ～ 1 点変ロの範囲がよいと記されていることから，実際の教材において，最低音では完全 4 度，最高音では増 4 度の拡張がなされている。

表７　『教科適用幼年唱歌』（三編上巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	春の山	2/4	Fdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
2	和気清麿	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
3	燕	2/4	Gdur	1 点ニ	2 点ニ
4	潮干狩	2/4	Gdur（四七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
5	北条時宗	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
6	蝙蝠	2/4	Fdur（七抜き）	1 点ヘ	2 点ニ
7	平重盛	2/4	Fdur	1 点ハ	2 点ニ
8	汽車	2/4	Gdur（七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
9	新田義貞	2/4	Fdur（四七抜き）	1 点ヘ	2 点ニ
10	海水浴	2/4	Fdur	1 点ハ	2 点ニ

表８　『教科適用幼年唱歌』（三編下巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	日本三景	2/4	Fdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
2	皇恩	2/2	Fdur（七抜き）	1 点ヘ	2 点ニ
3	大和男児	2/2	Fdur（四七抜き）	1 点ハ	2 点ニ
4	森蘭丸	2/4	Gdur（七抜き）	1 点ニ	2 点ホ
5	菅公	4/4	Bdur（四抜き）	変ロ	2 点ニ
6	年の暮	6/8	Fdur（七抜き）	1 点ヘ	2 点ニ
7	養生	2/4	Ddur（七抜き）	1 点ニ	2 点ニ
8	護良親王	2/4	Gdur	1 点ニ	2 点ニ
9	鶯	2/4	Gdur	1 点ニ	2 点ニ
10	野遊び	4/4	Fdur（七抜き）	1 点ハ	2 点ニ

まず，拍子において，『教科適用幼年唱歌』（三編上巻・三編下巻）では，4 分の 2 拍子を 15 曲（75.00％），4 分の 4 拍子を 2 曲（10.00％），8 分の 6 拍子を 1 曲（5.00％），2 分の 2 拍子を 2 曲（10.00％）とり入れている。『尋常小学唱歌教授書』［第三学年］では，4 分の 2 拍子を六分，4 分の 4 拍子を三分，4 分の 3 拍子を一分くらいの割合にすることが望ましいと記されており，この学年においてはじめて 4 分の 3 拍子をとりいれることが推奨されているが，実際の教材においては 4 分の 3 拍子の曲は見られない。しかし，二編までの教材と比較すると，三編になるにあたってとり上げられている拍子の種類が増えていることがわかる。

次に，旋法において，『尋常小学唱歌教授書』［第三学年］では，西洋の長旋法を八分，西洋の短旋法と我が国の律旋法を二分くらいの割合にすることがよいと記されているが,『教科適用幼年唱歌』（三編上巻・三編下巻）では，全ての曲が西洋の長旋法にあたり，短旋法や律旋法からなる曲は見られない。

また，最低音と最高音に着目すると，『教科適用幼年唱歌』（三編上巻・三編下巻）では変ロ～2点ホまでの音域が使用されていることがわかる。一方，『尋常小学唱歌教授書』［第三学年］では，1点変ホ～1点イの範囲がよいと記されていることから，実際の教材において，最低音では完全4度，最高音では完全5度の拡張がなされている。

表９　『教科適用幼年唱歌』（四編上巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	海の世界	2/4	Bdur（四七抜き）	変ロ	2点ニ
2	近江聖人	4/4	Cdur	1点ハ	2点ニ
3	山路の旅	2/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
4	夕立	2/4	Gdur	1点ニ	2点ニ
5	蜂	2/4	Gdur → Ddur	ロ	2点ニ
6	汽船	2/4	Gdur（四七抜き）	ロ	2点ニ
7	菊	2/4	Gdur（七抜き）	1点ニ	2点ニ
8	行軍	2/4	Gdur	1点ニ	2点ホ
9	徳川光圀	2/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
10	源平の戦	2/4	Ddur（四抜き）	イ	2点ニ

表10　『教科適用幼年唱歌』（四編下巻）音楽的分析

	曲名	拍子	旋法	最低音	最高音
1	二宮尊徳	3/4	Bdur（七抜き）	変ロ	2点ニ
2	鶏	2/4	Cdur	1点ハ	2点ホ
3	大砲	4/4	Edur（七抜き）	ロ	2点ホ
4	国旗	3/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
5	五港	2/4	Fdur（四七抜き）	1点ハ	2点ニ
6	凱旋	4/4	Fdur（七抜き）	1点ハ	2点ニ
7	水鳥	4/4	Fdur（七抜き）	1点ヘ	2点ニ
8	雪景色	6/8	Gdur	1点ニ	2点ホ
9	卒業の歌	2/4	Cdur	1点ニ	2点ホ
10	明治の御代	3/4	Gdur	1点ニ	2点ニ

まず,拍子において,『教科適用幼年唱歌』（四編上巻･四編下巻）では,4分の2拍子を12曲（60.00%），4分の4拍子を4曲（20.00%），4分の3拍子を3曲（15.00%），8分の6拍子を1曲（5.00%）とり入れている。注目すべき点は，第三学年からとり入れることが望ましいとされていた4分の3拍子の曲が，ここにきて初めてあらわれるということである。また，『尋常小学唱歌教授書』［第四学年］では，4分の2拍子を四分，4分の4拍子を四分，4分の3拍子を二分くらいの割合にすることが望ましいと記されていることから，実際の教材では4分の2拍子の曲に依然として偏りがちではあるといえるが，第三学年の教材と比較すると，4分の2拍子の割合が減少し，他の拍子の曲が充実してくることがわかる。

次に，旋法において，『尋常小学唱歌教授書』［第四学年］では，西洋の長旋法を八分，西洋の短旋法と我が国の律旋法を二分くらいの割合にすることがよいと記されているが,『教科適用幼年唱歌』（四編上巻･四編下巻）では，三編と同じく全ての曲が西洋の長旋法にあたり，短旋法や律旋法からなる曲は見られない。

また，最低音と最高音に着目すると，『教科適用幼年唱歌』（四編上巻・四編下巻）ではイ～2点ホまでの音域が使用されていることがわかる。一方，『尋常小学唱歌教授書』［第四学年］では，1点変ホ（一点ホ）～1点イの範囲がよいと記されていることから，実際の教材において，最低音では完全4度（増4

度），最高音では完全５度の拡張がなされている。

Ⅳ　総括

本研究では,『尋常小学唱歌教授書』［第一学年］から［第四学年］における田村虎蔵の唱歌教材観と『教科適用幼年唱歌』との学年毎の比較を通して,『尋常小学唱歌教授書』のなかで述べられている唱歌教材観が実際の唱歌教材にどの程度反映されているのか明らかにすることを目的し，なかでも曲節に着目して検討してきた。その結果，田村の唱歌教材観と『教科適用幼年唱歌』における曲節とでは，いくつかの相関関係が見受けられた。

まず，拍子において，学年ごとに比重は異なるものの，田村は４分の２拍子の曲を推奨しているが，実際に『教科適用幼年唱歌』の全ての巻において，４分の２拍子の曲が占める割合がもっとも高くなっている。第一学年の教材では，全ての曲が４分の２拍子であるが，田村が第一学年の曲としてふさわしいと考えていた快活さを生み出すための手段のひとつに,４分の２拍子が用いられたと考えることができる。また,３拍子の曲を第二学年まではとり入れないことや,学年が上がるにつれて拍子の種類を増やすといった点も，田村の唱歌教材観と一致している。

次に，旋法において,『教科適用幼年唱歌』ではほとんどが西洋の長旋法が用いられており，ここでも田村の唱歌教材観との相関関係が見受けられた。一方，各学年において，西洋の短旋法や我が国の律旋法もとり入れることを田村は理想としているが，実際には日本音階の曲が初編上巻で１曲，西洋の短旋法の曲が二編下巻で１曲しか見られなかった。学年が上がるにつれて優美・高尚な旋律や，より音楽的変化に富んだ曲をとり入れることを望む田村の教材観から見た場合,『教科適用幼年唱歌』では西洋の短旋法や我が国の律旋法の曲数が乏しいようにも思える。

最後に，音域であるが，ここでは田村の教材観と『教科適用幼年唱歌』とで一致しない点が見受けられた。『尋常小学唱歌教授書』では，第一学年では１点ニ～１点ロ，第二学年では１点ニ～１点変ロ，第三学年では１点変ホ～１点イ，第四学年では１点変ホ（１点ホ）～１点イの範囲をこえないようにすると述べられている。一方,『教科適用幼年唱歌』においては，初編では１点ハ～２点ニ，二編ではイ～２点ホ，三編では変ロ～２点ホ，四編ではイ～２点ホの音域が使用されている。ここで注目したいのが,『尋常小学唱歌教授書』において記されている田村の教材観では，学年が上がるにつれて，最低音は低音から高音へ，最高音は高音から低音へと移動し，結果として音域自体が狭まってきているのに対し,『教科適用幼年唱歌』では，最低音はより低音へと，最高音はより高音へと拡張し，使用される音域が広がっていく。学年が上がるにつれてより音楽的に複雑な旋律を求めた結果，使用される音域も拡張されていったのであろうか。

以上,『尋常小学唱歌教授書』における曲節を中心とした田村の唱歌教材観と『教科適用幼年唱歌』との相関関係を検討してきたが，田村の長年の現場経験をふまえてまとめられたものが『尋常小学唱歌教授書』のなかに見られる唱歌教材観であり，その観点と一致することが『教科適用幼年唱歌』に見受けられることは,『教科適用幼年唱歌』が子どもの発達段階を考慮して編纂された唱歌集であるということを物語っており，多少教育的に編纂したという緒言を裏付けるひとつの根拠であるともいえる。

本研究では，田村が編纂に関わった代表的な教材として『教科適用幼年唱歌』をとり上げたが，さらに多くの教材を用いて田村の唱歌教材観との比較分析を行うことにより，新たな特徴を見い出すことができると考える。加えて，今回は扱わなかった曲節以外の視点にも着目しながら教材との比較を行うことで，田村の唱歌教材観に対する理解がより深まるのではないだろうか。

註

1）田村虎蔵（1908）『唱歌科教授法』同文館，p.61。
2）同上。
3）前掲書１，p.62。
4）木津文彦（1974）「唱歌教育の試行と田村虎蔵の教材論」『静岡大学教育学部研究報告　教科教育学編』第６号，pp.13-27。

烏音嘎，小楠智子，黒川たまみ，清水泰博，渡邉厚美（2003）「言文一致唱歌の成立・内容に関する一

考察―『教科適用　幼年唱歌』『教科書準拠教科統合　尋常小学唱歌』の分析を通して―」『音楽教育学研究論集』第 5 号，pp.32-41。
杉田政夫（2000）「田村虎蔵の音楽教材観に関する研究」『音楽教育学研究　1』音楽之友社，pp.200-212。
鈴木治（1992）「田村虎蔵の童謡批判―批判の視点とその限界について―」『音楽教育学』第 22-1 号，pp.13-22。

引用・参考文献

・平緒佐和（2013）「田村虎蔵がみた『尋常小学唱歌』」わらべ館童謡・唱歌研究情報誌『音夢』第 8 号，pp.24-35。
・山田めぐみ（2012）「明治期の小学校唱歌科における唱歌教材に関する研究」『広島大学教育学部第四類音楽文化系コース平成 24 年度卒業論文』。

第一次史料

・田村虎蔵，納所弁次郎編（1900）『教科適用幼年唱歌』（初編上巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1900）『教科適用幼年唱歌』（初編中巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1901）『教科適用幼年唱歌』（初編下巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1901）『教科適用幼年唱歌』（二編上巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1901）『教科適用幼年唱歌』（二編中巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1901）『教科適用幼年唱歌』（二編下巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1902）『教科適用幼年唱歌』（三編上巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1902）『教科適用幼年唱歌』（三編下巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1902）『教科適用幼年唱歌』（四編上巻）。
・田村虎蔵，納所弁次郎編（1902）『教科適用幼年唱歌』（四編下巻）。
・田村虎蔵（1913）『尋常小学唱歌教授書』第一学年，昇文館。
・田村虎蔵（1913）『尋常小学唱歌教授書』第二学年，昇文館。
・田村虎蔵（1914）『尋常小学唱歌教授書』第三学年，昇文館。
・田村虎蔵（1915）『尋常小学唱歌教授書』第四学年，明治出版協会。